
ピンクの石のペンダント

綉芭葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピンクの石のペンダント

【コード】

N3856Q

【作者名】

綉芭葵

【あらすじ】

幼い頃は、可愛い子は、妖精みたいに見えるんです。

ねえ、覚えてる？

君と僕とが出会った日のこと。

実は僕は忘れてたんだ。

・・・なんて言ったら、君は少し僕の事を膨れた顔で見るのかな？

僕と君とが会ったのは、まだ幼かった子どもの頃。
今からみれば、まるで子ども。

だけどあの頃の僕らから見れば、精一杯大人だね。

君が始めて僕の前に現れた時、

「おかあさん、ようせいさんがいるよ！」
って叫んだんだ。

恥ずかしいだろう？

だけど本当にそう思ったんだよ。

君にその時は話しかけれなくて、

名前も聞けなくて、

ただ見ることにしかできなかったけど、

何日かして僕は勇気を出した。

「いつしよにあそぼ。」
そう言った。

何日か一緒に遊んで、何日かして、
君に小さな手紙をもらった。

「あそんでくれてありがとう。バイバイ。」

君は遠い町に引っ越すつて母さんに聞いて、
必死に走って間に合った。

「これあげる。」

公園で見つけたピンク色の石。

「ありがとう……。だいじにする。」

泣きそうな顔で、笑った、僕の記憶の最後の君。

そう、忘れてた。

忘れてたんだ。

けど。

また君に出会ったから。

ピンク色の石で作った、ペンダントをぶら下げた、
可愛くて、可愛くて仕方ない、僕の妖精。

君は覚えているのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3856q/>

ピンクの石のペンダント

2011年1月28日05時13分発行